





Faint vertical Japanese text on the left page, likely bleed-through from the reverse side.

76  
3116  
1-2



旧  
5  
422  
1-2





一 花と盛小月と隈水きとけり

女郎ハこゝへ小若流を先分好き切のこゝへ物  
りハ親小むうい若流を乞うけりてくまぬも表  
小娘と好う〜神とて角入〜類の書きこぎ  
見取多々れ書き〜たる友古けりあふも以も  
うま〜ふふあ〜れハ〜もさ〜もあ〜も  
〜てま〜でな〜もかき〜ハ〜見〜て〜い〜る  
小お〜ま〜事〜ハ女郎のま〜若流の元服と  
お〜む〜い〜い〜さ〜ら〜ら〜ま〜か〜  
あ〜れ〜人〜若髪お〜神〜ま〜ら〜今〜ハ〜見〜取〜





かきまじやぬまい又せしは藤もくし戸は  
しして秋のうきもあまひやとして表はゆき  
散葉もあまのこきりかききき音もむらもむら  
このなれ核もはまらけら行ふ人の名  
とらあまのやもあてあぬ世の人律もゆき  
まかぬふら特買もふか女郎もあまのれぬ  
きふままりたとい福もどらうつ  
なり大長かりとも末社あまのえしとちや  
かす息つまじりけまきし縁も葉屋なるとまや  
して五丁の福の神さむといつともおらるる間

ちこの里かよもやうて金つまぬし  
戸の中ふりよき人この里へ来し日  
なると百ふき人ぬ人のけりやさうい町  
本所所品川護國さうもけり人ねわらう日  
あまのまかぬ日りけりされいひく厄敷  
のまひまを際もあまの葉もあまの強  
まあまよひのあまのあまのまひま  
今日まで藤かきし者福もゆき  
しも実あまのあまひなんやしゆり  
とけりあまのあまのあまのあまのあま



新とよよとよの養のうらまゑなりとてしとて  
もいひうもせし客ういの定りれいも侍りたる  
なり年いいつつなり客けり世海もの語の切  
の詞形も大馬や藤井う手帳よりけり  
妙もよ糸のぢまいといふも糸人の内行  
ふもとけりいれまわりぬれもきくての  
き部してつうひも侍り床傍美もとこ  
のうらひこりまう共きいりきものさういひ  
はうちなる新造と書りまうとてふのもうけり  
ういひおひいよとて西鶴の物うとて

ふも傾國のちめりてまをかむのさむとて  
毫もてつるもとてきおのれとてさか  
墨さひいよとて名残をいひて判り  
なき道中の裕うとて八月十五日  
ふれかつらとてい先のあもせし菊の  
おやてもいひとて三浦のあもせし  
とていひて後ゆきもその内小髪のおも  
たしゆりうとていかんさきの葉のま  
ふり結をさしとておひねれをいひ  
けつとて白妙のつとて返りふあや  
の葉い者

なつりごとくもどかづらのたのむつ物さうとをた  
そひ出〜るゝあひ〜し〜か

之辰 家々あ〜るゝ本々相模ま〜の五葉

も〜

家々〜るゝま〜るゝ尾落雲山む〜るゝきむ〜か  
ら〜の〜道中〜い〜るゝ〜中〜るゝ〜るゝ〜るゝ  
りせ山中と浦す〜てい〜るゝ〜るゝ〜るゝ〜か  
すて〜るゝ〜るゝ〜るゝ〜るゝ〜るゝ〜るゝ〜るゝ  
古史す〜るゝ〜るゝ〜るゝ〜るゝ〜るゝ〜るゝ〜るゝ  
い〜るゝ〜るゝ〜るゝ〜るゝ〜るゝ〜るゝ〜るゝ〜るゝ

世々〜るゝ〜るゝ〜るゝ〜るゝ〜るゝ〜るゝ〜るゝ  
ういた〜るゝ〜るゝ〜るゝ〜るゝ〜るゝ〜るゝ〜るゝ  
〜るゝ〜るゝ〜るゝ〜るゝ〜るゝ〜るゝ〜るゝ〜るゝ  
ま〜るゝ〜るゝ〜るゝ〜るゝ〜るゝ〜るゝ〜るゝ〜るゝ  
祿の〜るゝ〜るゝ〜るゝ〜るゝ〜るゝ〜るゝ〜るゝ  
あ〜るゝ〜るゝ〜るゝ〜るゝ〜るゝ〜るゝ〜るゝ〜るゝ  
酒も〜るゝ〜るゝ〜るゝ〜るゝ〜るゝ〜るゝ〜るゝ  
〜るゝ〜るゝ〜るゝ〜るゝ〜るゝ〜るゝ〜るゝ〜るゝ  
ち〜るゝ〜るゝ〜るゝ〜るゝ〜るゝ〜るゝ〜るゝ〜るゝ  
今も〜るゝ〜るゝ〜るゝ〜るゝ〜るゝ〜るゝ〜るゝ〜るゝ

かきまて輪わりの事い機女の碎りまきく  
ふきねし石たふしなひあきてめもむその形そ  
我郎うげないつまもたまねるよぬまの苦我  
小栗あいご武後とまふ言はねるハまんく  
田川女郎かきまて不自由なまのハ藤の間ふち  
ふしかきまてとまふけのなまなまあま  
かきまていしつねに海もまきん  
しつてよこの外名まひうけの石開ふく  
しねとまねるまらう女郎の形はけり  
まきまてしつねにあまのやわのまて具き

おへ女おれ名をなすても有ねん

四段 月張りて成疎こころい

そこのまて名代しつねにまきのまきまて  
話まきまてぬ新造まひまてまきまて能女  
郎いしつねにあまの言はねるハまんく  
まきまてねるまて大一段の初會まらつきの間  
たうし我をまてしつねにまきのまきまて  
あまの言はねるまてあまの言はねるハまんく  
能女もまきまて名代しつねにまきのまきまて  
まきまてしつねにあまの言はねるハまんく

あつたのわい何変もそのうけとせてあつたまか  
き

五版 照田院竟蓮上人の

さつま外記をまいつつしついで浄土の才子とか  
や浄土のよも形を故々の人まで物ううも  
して江戸より京のよ縁をいついつううた  
のまれ都のよぬいさうきのさうして浄土  
ついで我たまされいさうとあはれをとも  
のさうやうよさうして住てなれて又侍  
よ縁のあつたあつたといあつたさうして

なつて心やさういふ小橋あつたあつた女郎のいふ  
この事うやけさういふさうしてよふは清いひさ  
あつたよいつ事うさういつつさうとあつ  
も縁と水うさうさうさうなれいさうつ  
実さうとぬいさうさうあつたさうぬい物  
思しけふさうさうさうさうさうさうさう  
さうさうさうさうさうさうさうさうさ  
さうさうさうさうさうさうさうさうさ  
さうさうさうさうさうさうさうさうさ  
さうさうさうさうさうさうさうさうさ  
さうさうさうさうさうさうさうさうさ

そはるあゝいそいそきましくひそやとおまひ  
—ふあのもつ徳の後むく—なまておわ  
中ふきかゝてそちいら—いか—や—  
—く—はちてそのまけか—ふ—お  
え侍—

六段 むね—もろ—もろ—もろ—  
つ—もろ—

あ—はは—もろ—もろ—もろ—  
のけあ—お—け—  
らいては—女ま位のきまふあいてお—

お—もろ—もろ—もろ—  
—ハ—お—もろ—もろ—  
はむふ—もろ—もろ—  
—もろ—もろ—もろ—  
なり—もろ—もろ—  
ぬつ—もろ—もろ—  
—もろ—もろ—もろ—  
—もろ—もろ—もろ—  
—もろ—もろ—もろ—  
—もろ—もろ—もろ—  
—もろ—もろ—もろ—



も二人とつてなほさきざわんといひたれども又  
多分立ちまゐりてあるさうさやいさけのよして  
善門昌法とあるよきさやいさけと人れはむむと  
とあるさふたつとさやいさけと人れはむむと  
いさけと人れとさやいさけと人れはむむと  
事々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々  
をねつとつとつとつとつとつとつとつとつと

九段 法隆寺素重於北面の下野の段

法隆寺の妙用也此は法隆寺の妙用也此は法隆寺の妙用也  
若死の相ありて人れ能くつとつとつとつとつと

いひたれどもいさけとつとつとつとつとつとつと  
法隆寺の妙用也此は法隆寺の妙用也此は法隆寺の妙用也  
のさきとつとつとつとつとつとつとつとつと  
いさけとつとつとつとつとつとつとつとつと  
さきとつとつとつとつとつとつとつとつと  
いさけとつとつとつとつとつとつとつとつと  
いさけとつとつとつとつとつとつとつとつと

十段 法隆寺素重於北面の下野の段

法隆寺の妙用也此は法隆寺の妙用也此は法隆寺の妙用也  
若死の相ありて人れ能くつとつとつとつとつと

ふとの箱ありいりね事やんといひたれど  
先は舟は度量つひれんよあはれまていりね  
お上人きぬもやそりやういふまふまふ  
とささいひのそと水も申さまして深川のお  
ちと不弟してさうとと人とな様をよかして  
共せりいりり

十一段 奈法あまの雨となりぬと

女郎あまの雨のそと逢ぬと小娘女郎ふゆ  
は時きとそとつゆちう人の云あまのそと  
水もさけあはれたふしての事さうまひまきと

十二段 四十之後の人さふ奈とくま

五十之後の人さふ奈のそと逢ぬと  
大いさういりりいりり

十三段 麻草と鼻ふあて

かんにて寝かて鼻は新し出たりと白ひきて  
鼻をつまむといふ

十四段 能哉つらん

んわ

もいよかんとおとよ人若東のおとあはれ  
かまといよくと一往とあはれさけまて

元水抄神祇物語  
ありりりり



あつて恨むハ下愚の人形をわうしき事あふ  
ハ曲しきてまうしき事あふハおわつり  
うらまへしき事あふハおわつり  
んハ青つた事あふ

十六段 西大寺静然上人腰うしき事あふ

唐徳寺前名高き育女その歌うしき事あふ  
巻何れも亂色小琴ひききりハ金銀内古長なあふ  
たつものきんの事やハ大鏡十足もつりきりハ  
光次白ふととるやハつりきりハ  
されり後日小徳部とりハ唐路とてハつりきりハ

うせけききりたつりきりハつりきりハ  
又きりきりきりきり

十七段 為兼大納言入りきり

きりきりハ小徳部出さしてむうひの人おわつり  
きりきりハつりきりハ光次白仲の丁もてきり  
又りあかやハつりきりハつりきりハ  
らほかきりきりきり

十八段 世人東大寺門ふりきり

世の人根津の桑屋ふりきりハつりきりハ  
ふ女もあつりきりハつりきりハ

つぎとていふことにて白粉の  
はきつておぼえてきこしとていふこと  
者もねむも重くもふ多しとていふこと  
くもねむもやうて具つきてていふこと  
くもつたれとていふこと傾國の  
いてつて後年政をけしとていふこと  
の成かす一高てたのしとていふこと  
は兼てその成をていふこと似  
わつたれとていふこと此の  
皆いともていふこと

和之記巻道左院

十九段 世ふとていふこと人の  
志

大臣ふとていふこと  
ついであしき事ハ女郎も耳ふさうい  
少あういておとけし事  
とむけし事  
きんきの  
ついであしき事  
まかすま  
とていふこと







去録、結ひとせしつゝの語

廿四辰 門の類かゝるつと云ハ

門の枝はあんこくかゝるハよ明らぬや自  
書の名をふや〜〜のあんこくハ左の  
〜〜味<sup>法女</sup>〜〜のあんこくハ今ニツニツ  
も何ぞん〜〜え名を隠れも作〜〜不  
むつけあま〜〜の〜〜

廿五辰 水の盛るハ左の

女郎のさう〜〜十七〜十九二十も水あけ  
〜七年〜二十〜四〜

た〜や〜

廿六辰 通照の兼仕法師

依見町の若徳〜〜と〜〜 於女〜その  
通ひ〜若を法師〜〜 倫方と物〜  
小持〜は法師〜〜ら〜あま〜  
〜〜禁秘〜〜山田彦次郎古海門  
名〜時ふ〜

廿七辰 右衛門の右様

右田彦右の字点〜〜つ〜つ〜  
論のみ〜あ〜祭〜〜男〜〜

或古老、説あり  
つま核





小礼儀つゆふらふらひしてさぶ女ふらふら  
事形

二十二段 年若く一人一事にあられたる也

はな

三つはるゝ女郎をけてもくれゝるゝん一やう  
あつこの人お出し経て誰かかたし形を盛  
あつん形といふもゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
あつせいつゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
もあつ法もゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
あつゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

そゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
うゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
若ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
て情のあゝぬゝやゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
さゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
てゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
はゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
のゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
あゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ



おろろろな〜んゆ〜んをむ〜んぬ〜んぬ〜んぬ  
ハ女郎のむきひ〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん  
〜人の御ま〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん  
誰も〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん  
客のま〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん  
お終〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん  
〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん  
おは〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん

二十五段 男とおろろ

姓の〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん  
女房と〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん

〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん  
か〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん  
ち〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん  
君〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん  
せ〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん  
控〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん  
て〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん  
物と宿の敷食ゆ〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん  
い〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん  
ら〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん

らんりね〜とわく〜美を悪念をわく〜  
も〜む〜〜た〜〜と〜家〜〜  
〜と〜ね〜むや〜あ〜〜井筒の先の  
歌ふ沖津去〜浪籠回山東つきて〜  
の福を業〜〜と〜さ〜〜のふ〜〜さ〜  
あ〜む〜れ〜い〜〜身〜〜人道もか〜  
侍〜ん〜う〜我つ〜と〜たんの〜さ〜せ〜  
う〜せむや〜〜わ〜い〜ま〜〜て〜  
かれ〜も〜習水〜う〜時〜〜て〜  
む者ふ物〜を〜虚小沈ん〜て〜  
〜

く〜い〜海〜〜人〜の〜竹〜あ〜の〜  
け〜前〜の〜書〜の〜然〜い〜と〜や〜あ〜う〜〜  
あ〜の〜〜ま〜ん〜の〜奴〜い〜と〜〜  
又胃のま〜〜〜あ〜〜〜せい〜  
か〜くれ〜の〜〜〜い〜長力あ〜い〜  
〜〜〜ふ〜と〜あ〜〜〜か〜け〜出〜  
も〜な〜い〜

二十六段 とうき時を血業〜  
新造のとき〜  
〜と〜家〜〜孝〜と〜師〜直〜と〜





二十九段 せよハ心えぬ事のみきりて

せよハ心けぬらとまきりて先女の悟氣と折る  
ハ具もとちりけん男はまの毒とつる途也と  
面白くも浮く悟氣とささくくして月の不  
まきを又ても何言ふハ心と通一まきりてハ  
とてせよと何とて月は細きと男のまが  
りハ如くまきりてとまきりてハ如く  
くあてね人のふとてふたては其まきりて  
とまきりてハ如くまきりてハ如くまきり  
と食ふともくまきりてハ如くまきりて



く他の人まきりてとまきりてハ如く  
まきりてハ如くまきりてハ如くまきり  
あひむとてハ如くまきりてハ如くま  
うと我方をたハ如くまきりてハ如く  
くくくくくくくくくくくくくくく  
種あまはあふあひハ如くまきりてハ  
ハハ猫のまきりてハ如くまきりてハ  
けそのまきりてハ如くまきりてハ如  
引出しとつてハ如くまきりてハ如  
白濁とてハ如くまきりてハ如くま

ま〜〜とあつら〜〜むの邪なまゆ〜〜まの目  
付る那〜〜な〜〜行〜〜も大〜〜毫厘の及い  
ない〜〜形〜〜一息吐いて朝の命ふ〜〜ま〜〜吉母  
汁むさゆあ〜〜う〜〜付多きい〜〜んか〜〜得  
た〜〜ぬ方までた〜〜ぬ行先〜〜行海いて〜〜もあ  
し〜〜の海〜〜ぬ〜〜い先ゆ〜〜の〜〜つ〜〜我〜〜く〜〜行方  
つ〜〜行ゆい〜〜ん〜〜とせ〜〜と〜〜してま〜〜のむ休  
〜〜持てふの世も後の世も益に〜〜も〜〜ぬ〜〜ぬ  
い〜〜う〜〜とんか〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜  
まらおわ〜〜家〜〜も〜〜も〜〜も〜〜も〜〜も〜〜も〜〜も〜〜も

ふ〜〜我たの〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜  
さ〜〜ひ〜〜は〜〜終〜〜る〜〜を〜〜お〜〜し〜〜る〜〜も〜〜い〜〜ら〜〜我  
〜〜と〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜  
あ〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜  
い善根とや〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜  
飛〜〜ともや〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜  
〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜  
〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜  
〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜  
女なれ〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜  
小月〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜



きうせしむるもむねをまておいまほしくいぬい  
けうせしむけきそそのしき福のうけよせしむ  
あしむしむい今も元とすいしむ

四十一段 種彦の中書よりては鞠のあそ

きよふ

いしむきあてねの悪しむまりて花の者しむき  
師骨のあわれきいさしむきしむ。男の扇あのみ  
祐とさしむまいしむせまれいあしむのうらまの  
つしむいなるをきり下しむいさしむしむしむ  
うねしむて人うんしむあしむきりしむしむ成。者の

語りてあそしむふふ葉の傍れかきあぬい水と  
あけぬしむものなれいさりしむ本枝のあしむしむ  
よしむ水とあしむ。物をしむ枝葉のなるしむしむの  
たましいあそしむしむしむしむしむしむしむしむ  
しむしむしむしむの骨れむけふなるしむ花のましむ  
しむしむ人向しむしむしむしむしむしむしむしむ  
古きあしむしむしむ

四十二段 或あのかしむしむしむ

あそしむしむ女中達しむしむしむて道中しむ物しむしむ  
きしむしむしむ二人しむしむしむしむしむしむしむしむ

ついでに供うまき女房の老妪をついて  
も格もともてあはしき思ひやうよひあはしむ  
ふらふらとその人物も女郎のまへに  
しめや

四十三段 入来れ沙門に服上人

念佛の沙門に服上人たる念佛と奉託してまゝの  
ふらふらと重なる所ありておもき彼等とて淡  
弟と信じてて菴室とてまゝて西方とて早とてこの  
聖にやまれぬ古来の大門に北向の形もとかは  
るゝ候とてさひつゝもれと細見の事なりとふ

もろくは見えなすの扉はいりぬる女は  
ふらふらと重なる所ありておもき  
むきやゆ編ありとてやま

四十四段 さきちやうい

三浦の几帳はいりてやまると方信とて。其帳  
と京所とて津辺へ出るとてうらふらと重なる  
形成物とていりて親も白の結馬ありとて  
とて

四十五段 物とて小曾たんとて小由

とて









去らぬもくくは好つていふふらたてて茶  
の湯と習ひてわく官可も元事一立花う  
るあまも海うてきく若くてあかきうて  
ふく習うてきく隙あて年をくけあて  
のふあはぬ部のかつふけふわき若きう  
いひかきもふを特てきくふとの  
あて大臣大臣なりもきくいふて世を  
けくうふあきいあきも若きうて  
てあ次あふあきけついついふは九月の深あ  
けくうてうてとあてきくいふてあて

大八事  
子孫鑑

あてくくくくは好つていふふらたてて茶  
の湯と習ひてわく官可も元事一立花う  
るあまも海うてきく若くてあかきうて  
ふく習うてきく隙あて年をくけあて  
のふあはぬ部のかつふけふわき若きう  
いひかきもふを特てきくふとの  
あて大臣大臣なりもきくいふて世を  
けくうふあきいあきも若きうて  
てあ次あふあきけついついふは九月の深あ  
けくうてうてとあてきくいふてあて

くまきなりたしハ 誦徳も一人一白も  
つふまけ人にも先ふ仕宿九とまけ長と  
白つらうちまの島も十島とのと  
のやま十島と越十一島つらハの  
まの島もあんなはくま  
やまもさん華とおまの島  
白はくまふまの島は深も島もま  
そめふくまの島は白のおまの島  
女郎やまもけく用もてまの島  
くま西の島もまの島

くまきなりたしハ 誦徳も一人一白も  
つふまけ人にも先ふ仕宿九とまけ長と  
白つらうちまの島も十島とのと  
のやま十島と越十一島つらハの  
まの島もあんなはくま  
やまもさん華とおまの島  
白はくまふまの島は深も島もま  
そめふくまの島は白のおまの島  
女郎やまもけく用もてまの島  
くま西の島もまの島

五の路をゆくふ会相年やあゝかゝあまゝか  
のをもぢひふなを侍つゝはうゝんゝい  
あゝとあまゝふとのさうゝあやゝてゝ  
いひあれや世下の事を侍らゝゝものゝ人  
の命は雨の時同くも侍りのゝいあも死な侍  
つともせやふ侍らんやゝけやゝたを侍つゝ  
吾い侍るふりてゝ侍るゝ侍るゝ  
まゝゝふそあれ死てゝまてぬるゝ侍るゝまつ  
とゝゝいゝ侍るゝ世ゝゝいゝ侍るゝ侍るゝ  
まゝやゝふゝ大事因縁とゝあゝゝゝ

以て女もまぢつや  
いひあれや  
大佛あゝゝ

